

編集後記

編集長(ダン シロウ)

●創刊当時、10年続くことなど考えていなかった。むしろ、すぐ潰れるとか、頑張っただけで続けろ！と思っていたのではない。毎号重ねていたら今号で9年を終え、いよいよ10年目を迎えることになったただけだ。続けようとしたというより続いた。多分、世の中には、こうした営みが溢れている。

ちょっとしたことで大騒ぎしたり、自慢したり、時代の寵児になりたがりすぎる輩も多い。そんな世界で、黙々と10年、20年、己のすべきことに従事する。こういう人々の成果の下に、私達は暮らしている。それが社会への信頼の根拠であり、安心である。

政治家や国家公務員批判が目的ではない。私達の日常、周囲にも散見される、あまりにも杜撰で誠実さを欠いた仕事が、社会の大切なものをどんどん崩していくのを心配しているのだ。日本のマスメディアの弱虫加減も、SNSの無知も、結局云ってるだけだから、あれで済んでしまう。何事によらず、具体化して実行する。それしかない時代なのだ。

●「病児保育所奮闘記」大石さんの連載が休止になる。事情は御本人の執筆者短信をご覧ください。臼井さんの連載は10回をもって一区切りとお申し出があった。しばらく休載、今回はお休み、いろんな方がある。

脇野千恵さんからは、復活、連載再開の宣言。そしてサトウタツヤさんは久々の登場だ。

10年目を迎えようとする本マガジン、時の変化を受けて、執筆者もいつまでも同じという訳にはいかない。世の中が刻々変化しているのだから、こちらの変化も当然だ。日々新たに引き締めていきたいと思えます。そんなこんなで、今号も300頁越え。関心の領域からぜひご覧下さい。

編集員(チバ アキオ)

日本のプロバスケットボール、Bリーグにはまって、半年も経っていない。それでも結構わかるようになった。父が亡くなって秋田に行ったときに、気分転換をしたくて、

実家近所のアリーナをホームとする「秋田ノーザンハピネッツ」の試合を観に行った。秋田でこれだけ人が集まり、これだけ興奮している秋田人をたくさん見るのは初めてだった。当然、相当熱心なファンがいる。そこでの有名な人もいる。今はインターネットとSNSの時代でどっぷりとハマり、横のつながりができる。それを甘受できる環境が整っている。炎上など、意見の交換には不向きではあるが事実を伝えることは十分できる。事実の威力からSNS禁止の職場も当然ある。公式にそうは言わなくても様々なルールでそれを明に暗に醸し出しているところもある。

そうした流れからは距離を置くのが対人援助学マガジンであり、その執筆陣である。意識しているのは社会である。たくさんの方が物語をつくる。担保された事実が新しい時代への原動力になる。小さな事実の積み重ねからしか始まらない。きちんとした事実の積み重ねは報われないことはない。目の前の出来事にきちんと向き合う。世の中捨てたものではない。そう多くの人に伝えようとしている。社会への信頼の回復である。人間への信頼の回復である。未来への希望の回復である。

父と別れたこの時期に、ハマること。この心理的な意味は深く理解している。それでも幅が広がるし、経験も広がる。そういう時期があってもいいのだ！バモス(やってやろう)！

編集員(オオタニ タカシ)

「好きを仕事にする」。一見魅力的なようで、どこかの学校の入学者募集のキャッチコピーのような軽さも感じられる言葉。おそらく後者は、「なりたい職業」や「特定の職業のもつある(わかりやすく、典型的な)一側面」を表しているに過ぎないからだろう。仕事は苦勞してなんぼで現実はその甘くないよ、という声も聞こえてきそう。

そんなことを思いながら我が身を振り返ってみると、総じていえば、やりたいことを仕事にできているという実感がある。もちろん、細かな不満がないとは言わないけれど。今の職場に採用が決まったのは、ちょうど16年前の3月。4月1日の初出勤まで2週間ほどのことで、正直に言えば「好き」になる以前に、「知らない」職場だった。学部時代の恩師から他に決まっていなかったのなら行ってみないかと声をかけてもらったことがきっかけだった。

「面白そう」と思えたお誘いには、あまり先のことを心配し過ぎず、基本的にはのる方向で考えてみる。この行動方針が、今のところはいい方向で機能しているのかも知れません。このマガジンでの仕事も、好きなものの一つです。私にとってのよき導き手の方々に感謝しつつ、徐々に自分でしっかり選び取っていく力も備えていかないといけない年齢になってきたとも感じているところです。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町4 3 8
ランプラス二条御幸町4 0 2 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻36号

第9巻 第四号

2019年3月15日発行

<http://humanservices.jp/>

**第37号は2019年06月15日
発刊の予定です。**

原稿締切2019年05月25日！

いよいよ10年目を迎えるマガジン。新たな書き手を求めています。新たなジャンルからの、書き手の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決まっているわけでもありません。必要な回数(ずっと・・・というのもあります。)を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いします。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

ヒトコマ漫画「公園の生き字引」を描いたのは、何十年前のことだ。私は気に入っていて、今も通用する感覚だと思っているが、皆さんの目にはどうだろう。

たくさん見識を頭の中に持ち、体験を蓄積した高齢者達。肉体的な衰えは高齢化の常だが、人生は体育祭でも、ミスコンでもないから、活用の場はいくらでもあると思う。

しかしそう思えない多くの人達が、アンチエイジングだ、老後不安解消のための利殖だと落ち着きなく蠢く。

元同僚のNさんと話しているとき、この話題が登場して、PCに保存してあったこのマンガを見せた。社会学者の関心としたら、今日の日本社会に浮遊するあらゆるテーマとリンクする観点だ。

漫画家は上から目線で何かを語れるほど賢くない。そんなつもり、偉そうに斜に構えた漫画家など、あっという間に消えてしまう。

加藤芳郎さんに代表されるような、かつての漫画家は、その道のインテリだった。だからちゃんと漫画家視線の教養人として物事を語っていた。

今、そういう賢者は少なくなって、マーケットのアイテムの一つとして漫画家も存在する。売れるか、売れないかだと言われると、編集者のいろんな意見も呑まざるをえない。

更にもっと大きなうねりは、ヒトコマ漫画など必要としない社会の現実が、そこにこだわる漫画家に大きく覆い被さってきている。

(2019/03/15)